

◆ 篠山市 小島 典夫

「古文書体得心得之事」

古文書に関わったのは、退職後、自分の時間をどう使うか、趣味を持つこと。たまたま、目についた篠山市古文書講座。6年限りでしたが、地域状況もいくらかは頭に残る。でも古文書自体は、最初、全く字が分からず内容もさっぱり不明。それでも数読むと言うより見る事で漢字の形で判断しながら前後の文書の内容からこういう事を言っているなど感じる。段々と古文書の言い回し方が頭に入り、こう読むのだなと思いつく。全く分からない字は辞書を引く。でも、分からない。読める方に聞いてみる。こんなことで勉強が続いている。昔、こんな事をしていたのだなと知識が頭に残る。

さて、この勉強が何に役立つのかは、現在のところ思いつかない。でも、講座に出て学生時代の緊張を味わっている。予習と復習をやっておかないとついていけない。どうしても不明であれば質問すればいいのだ。自分にとって不得意な文書も

ある。全く読めない文書もある。でも、さらに読めるようになりたい。自分の「教育」并「教養」は「今日行く」并「今日（の）用」と考え、講座出席を心掛け、温故知新により何か？に生かせればと考えています。

◆ 春日町松森 小西敏晴様

丹波古文書倶楽部への想い
古文書を習おうと思いついたのは、地元自治会長を勤めていた時、(平成十五年頃)区に保管されていた古文書約百点を始めて見た時からです。

つたない筆致でミミズの爬った様な文字は、殆ど読めず、何とか読めるようになりたいと、古文書を習える場がないか、教育委員会等に尋ねても当地方には有りませんでした。新聞等で見た講習会に出てみましたが、単発の講座では、物にならず、諦めかけていた平成二十二年に、丹波シニアアカレッジに古文書講座が開催されることになり、早速申込み、七十四歳の手習開始、ここで木村修二先生に、お出合でき師事することになりました。

一年間、無我夢中で勉強するうち、暗闇の彼方にチラッと薄

い光が見えかけました。しかし、講座は一年で終了です。そこで、受講生のうち、川口利和、八木甫瑛子、佐中ますみ、三氏と私の四人で、「丹波古文書倶楽部」を、平成二十三年度に立ち上げる事が出来ました。生涯学習センターの指導と、木村修二先生の御好意の御蔭です。

以来六年目に入り、会員の皆さんの読解力も一段と進歩しています。歳の割に落ち着きのない私は、先生に叱られてばかりですが、それなりに読めかけたような気がします。区有文書も、少しずつですが、読み下せています。研鑽を重ね読解を進めると共に、併せて収集中の資料ともに、「松森区史」を、何とか纏め上げるのが、私の悲願であり夢です。

会員の皆さん共に励もうではありませんか。私も今年で八十歳です。どうか、時間切れになりません様に。

情報提供(みちしるべ)

◆ 書評『無私の日本人』

延陽伯こと岸孝明

この本は、『武士の家計簿』などでおなじみの磯田道史氏

が、かつての奥州街道の吉岡宿(宮城県黒川郡大和町)に伝わる「国恩記」と言う古文書を基に小説化した作品です。

明和年間(1770年代)頃、過酷な伝馬役を押し付けられ疲弊して行く宿場を救うため、穀田屋十三郎等9人の資産家が知恵を絞り、私財を投げ打って千両の大金を財政難に苦しむ仙台藩に貸し付け、毎年百両(江戸時代の利子は一割が当たり前)の利子を受け取り、それを宿場のみんなに配ることで、宿場の存続を図った、しかもその美談を子々孫々、一切、誇ること、語ることを許さなかったと言う実話です。

支配される百姓たちが支配者を手玉に取る痛快な話として『殿、利息でござる』と言う映画になって好評上演中です。

その原作は『無私の日本人』中の一編「穀田屋十三郎」ですが、彼らの行動の原点は「村あつての個人のならわい」と言う惣村の掟とともに、自らの村と自分を救うのは、お上ではなく自らの働きである、と言う確固とした信念だったと思われる。

江戸期の庶民の中にこのよ
うな美質・気風が生きていたの
は驚きで、あまりに高潔過ぎる
嫌いもありませんが、皆さんに是
非、読んでもらいたい本です。
(文春文庫「い 87 3 ¥ 590」)